

為さねばならぬ

突然の衆議院解散から9月11日の総選挙に向けて今や選挙戦真っ只中です。自民党は「郵政民営化」、民主党は「年金改革」を旗印にして、相手方への批判合戦を繰り返しています。2大政党を中心とした勢力のいずれかが過半数を確保すれば、おのずと勝利した方の党首が総理大臣になり、お互いの重点政策がはっきりしていますので、今回はまれに見る「政権選択の選挙」あるいは「政策選択の選挙」となりそうです。しかし、いくら立派な内容のマニフェスト(政権公約)も、実行できなければただの紙切れですので、実現可能性も含めて判断する必要がありますが・・・。

かつて、第35代米国大統領、ジョン・F・ケネディに「最も尊敬する日本の政治家」と言わせた人がいました。その名は「上杉鷹山(ようざん)」です。

鷹山は江戸時代中期に日向(宮崎県)高鍋藩から米沢藩主上杉重定の養子となりました。もともと上杉家は名門でしたが、関が原の合戦で石田三成に味方したため、徳川家康に減封されるなどして藩の収入は1/8になったにもかかわらず、元の120万石の格式だけは踏襲し、年間6万両の支出に対し収入は半分の3万両程しかないので、藩の財政はたちまち傾き、借金も20万両にも達していました。その上、収入を増やそうと重税を課したので、藩から逃亡する人も続出し、人口はかつての13万人から10万人程度に減少してしまいました。

そんなどん底の状態、鷹山は若干17歳の若さで第9代藩主の座につきました。就任当時米沢の土地は痩せて荒れ果てていました。ある時、鷹山は灰皿の灰を見て米沢の状況とダブらせましたが、冷えた灰をかき混ぜていると小さな火の残りがありました。それを見た鷹山は目を輝かせ、新しい炭をその残り火に移し始めました。さらにその場に側近を集めて言いました。「灰の国ではどんな種をまいても育たない。だから、人々の表情に希望がない。しかし、この灰の中で残った火種は次から次へ新しい火をおこすことができる。この火種は誰であろうお前たちだ。そしておまえたちの胸に燃えている改革の火を、新しい炭である藩士や藩民につけてほしい。中には濡れている炭、湿った炭もあるだろうが、その中にもきつと火がついてくれる炭があると信じている」。側近達は感動し、その炭の火を自分に分け与えるよう次から次へと申し出たそうです。

鷹山は既得権益を守ろうとする守旧派の激しい抵抗にもかかわらず、徹底した藩政改革を推し進めていきました。藩主は藩(国家)と人民を私有するのではなく、「民の父母」としてつくす使命があると鷹山は考えていました。その基本方針を「三助」すなわち、自ら助ける「自助」、近隣社会が互いに助ける「互助」、政府が手を貸す「扶助」としました。

鷹山は「大儉約令」を実施する一方、米作以外の殖産興業を進め、武士達にも自宅の庭で作物を栽培するように命じました。これらは鷹山自らも実践し、「自助」の精神を身をもって示しました。農民には組合を作り、災害時には近隣が救援すべきことを決めました。ある時、損傷した橋を藩では財政難で直せない、下級武士たちが無料奉仕で大修理したところ、江戸から帰ってきた鷹山は感動し「このような立派な橋をとうてい馬では渡れぬ」といって馬から下りて橋を渡ったそうです。これは鷹山が武士たちの「農民や町民のために」という「互助」の精神をなにより喜んだというエピソードです。天明の大飢饉の際には鷹山の素早い対応で、近隣の藩では多数の餓死者がでたにもかかわらず、米沢藩では餓死者は一人もでなかったという、「扶助」の成功例もあります。

ケネディ大統領の有名な演説に「国家があなたに何をしてくれるかを問うのではなく、あなたが国家に何をしてくれるかを自問してほしい」という一節があります。今の日本の財政の大幅な赤字は、政府の公共事業や社会保障などの「扶助」が大きく膨らんだことも要因としてあります。ケネディ大統領は「自助」「互助」を実践した鷹山に通ずるものがあつたからこそ、尊敬する日本の政治家として上杉鷹山を称えたのでしょう。国民も改革の覚悟を決める必要があるのかも知れません。

政治家の中には、選挙ではやたら「改革」「改革」と唱えますが、自分の既得権益に及ぶとなると難癖をつけ、改革の対象から除外させようとする人がいます。いわゆる、「総論賛成」「各論反対」です。今回の政治の一連の騒動がそれを露呈しました。鷹山は「改革というのは制度や政治のやり方を変えるのではなく、人間が自分を変えることだ。」と言う。鷹山のあまりにも有名な言葉「為さねばなる、為さねばならぬ何事も、成らぬは人の為さずなりけり」。平成の「上杉鷹山」は誰なのか、果たして現れるのか、今回の歴史的な選挙に大いに注目しています。